

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語の方向性格助詞「へ」と韓国語の方向性格助詞「로 (lo)」の対照研究における問題点
Auther(s)	林, 垠貞
Citation	ニダバ , 25 : 18 - 27
Issue Date	1996-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047984">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047984</a>
Right	
Relation	



# 日本語の方向性格助詞「へ」と 韓国語の方向性格助詞「로(lo)」の 対照研究における問題点

朴 垠 貞

## 0.はじめに

本稿の目的は、日本語の方向性格助詞「へ」と韓国語の方向性格助詞「로(lo)」を対照し、意味論的な考察を通して日本語と韓国語の特質を探り、問題点を指摘することにある。その際、単に日本語の方向性格助詞「へ」と韓国語の方向性格助詞「로(lo)」を取り上げるだけでなく、日本語の「に」格や韓国語の「에(ey)」格とも比較しながら考察を進めていく<sup>1)</sup>。

## 1. 先行研究と問題提起

日本語の方向性格助詞「へ」については、田中(1977)が連用格助詞として取り扱い、「に」と比べてその特徴を「「に」が存在の場や帰着点あるいは比較の基準などを静的に定位するものであるのに対し、「へ」は動的な指向性や経過性を持っている」と述べた<sup>2)</sup>。

韓国語の方向性格助詞の先行研究には、洪(1978)がある。洪(1978)は、方向性を空間的方向性と時間的方向性に二分し、空間的方向性をさらに目標(goal)と方向(direction)と通過(path)の三つに下位分類した。その際、洪(1978)は、方向性表示の格助詞について

「「에(ey)」はある動作が到着して停止するよう既定の事物や場所を表す目標の意味を持ち、「로(lo)」はその目標に向けた動作の方向の意味を持ち、そして「을/를(ul/lul)」は行為が持続される地域内での行為の結果を表す通過の意味を持つ」と述べた。

本稿では、日本語の「へ」格と韓国語の「로(lo)」格だけを方向性格助詞として取り扱うことにする。

日本語の格助詞「に」が帰着点での密着した感じを表すとすれば、格助詞「へ」は帰着点への経過を強調している(国立国語研究所:204)。これにより、日本語において「に」格は静的で、「へ」格が動的であるということは説明できる。そして、これは韓国語においてもいえることである。韓国語の「에(ey)」格は静的であり、「로(lo)」格は動的な感じがする。

しかし、日本語の「へ」格が動的であり、「に」格が静的であるということは韓国語の「로(lo)」格と「에(ey)」格の場合よりも非常に曖昧な境界線をもっている。そのた

め、日本語の「へ」格と「に」格の使い分け、そしてその使い分けと動的、静的な性質がどのように関わるかは今のところ曖昧性を残したままである。

本稿では、まず「へ」格と「로 (lo)」格の動的、静的な性質について述べる。そして、方向性格助詞と移動動詞との関係を考察する。その後、日本語と韓国語を対照して研究する際に現れる両言語における方向性格助詞の様々な問題点を指摘していく。

本稿の例文は大江健三郎の『日常生活の冒険』及びその対訳本と筆者による作例である。『日常生活の冒険』は、『日常』と略す。

なお、本稿で扱う移動動詞の移動とは主に生物が主体になる場所の移動である。そして、「動作」とは「静止」ではない移動を含めた動きのことである。

## 2. 「へ」格と「로 (lo)」格の動静関係

(1)鉛筆はそこに/\*へあります。

연필은 거기에/\*로 있습니다.

(2)ここに/へサインしてください。

여기에 /\*로 싸인해 주십시오.

(3)荷物は、玄関に/へ置いときます。

짐은 현관에/\*로 놓아두겠습니다.

(4)このソファに/へかけてください。

소파에/\*로 앉아주세요.

上記の例は、(1)は「存在」を(2)(3)(4)は「動作の存在する場所」を表している。韓国語の場合、「로 (lo)」格を用いることはできない。一方、日本語の場合は、文において「静止」から「動作」へという動作性が現れると「へ」格を用いることができる。しかし、上記の「へ」格を用いることができる(2)(3)(4)の例文は<sup>3)</sup>、「へ」格に後接する動詞は「動作」ではあるが、移動動詞ではない。韓国語の方向性の格助詞「로 (lo)」が用いられる動詞は、例文(5)のように移動動詞とだけであり、(2)(3)(4)の存在する場所とは共に用いられない。

(5)私は来年アメリカに/へ留学します。

나는 내년 미국에/으로 유학합니다.

(6)猫がドアの間\*へ/を**通り抜けた**。

고양이가 문틈으로/\*에 빠져 나갔다.

(7)猫がドアの間に/\*へ挟まった。

고양이가 문틈에/\*으로 끼었다.

(5)(6)は移動動詞が用いられた例であるが、韓国語においては「빠져나가다 (通り抜ける)」のような通過を表す移動動詞も「로 (lo)」格をとることができる。一方、(7)の例は、動作の結果現れる存在を表すので、「로 (lo)」格を用いることはできない。日本語

においても「へ」格をとることはできない。これは、場所に密着された状態を表すからである。以上をまとめると、次のようになる。

動静関係	日本語	韓国語	例文
静的 「存在」	「に」	「에」	(1)
「動作の結果」(場所に密着)	「に」	「에」	(7)
「動作の存在場所」	「に」 「へ」	「에」	(2)(3)(4)
「移動」	「に」 「へ」	「에」 「로」	(5)
動的 「移動」の結果	「を」	「로」	(6)

3．移動動詞の動作が片道（一方向）の移動を表す場合

ここでは方向性格助詞「へ」と「로 (lo)」を、移動動詞と関連して考察することにする。移動動詞は、垂直移動と水平移動の二つに分けることができる。そのうち、水平移動は片道を表す場合と往復を表す場合がある。片道を表す移動動詞はさらに着点志向性移動動詞と起点志向性移動動詞に分けることができる。着点志向性と起点志向性という用語は、宮島(1986)を参照にした。宮島(1986)は、資料に基づいて移動動詞を「到着点志向型（行く）」「出発点志向型（去る）」「通過点志向型（通る）」に分けた。このうち、大部分の移動動詞が「到着点志向型」であると述べた。仁田(1980)は「すべての移動動詞が<場所（着点）>や<場所（離点）>を同程度に支配しているとは限らない」というような点を指摘した。

本稿では移動の動きが目的地に近づく場合を「着点志向性移動動詞」とし、移動の動きが起点から離れて目的地に向かう行為に重点がある場合を「起点志向性移動動詞」と規定して考察する。

3.1 着点志向性移動動詞（移動の動きが目的地に近づく場合）

着点志向性移動動詞とは、起点性格助詞「から」や「を」と共に用いることができない移動動詞のことで、「着く」「到着する」などがそうである。そして、「行く」「来る」も着点志向性移動動詞として扱う。

日本語の「へ」格は、「に」格と同じく到着点を表すことができる。一方、韓国語における「로 (lo)」格は到着点が表せない。次は、日本語の移動動詞「着く」と韓国語の移動動詞「도착하다（到着する）」の例である。

(8a)電車が西条駅に／へ着いた。  
기차가 사이조역에／으로 도착했다.

(8b)電車がすでに（もう）西条駅に／\*へ着いていた。

기차가 이미 (벌써) 사이조역에／\*으로 도착했다.

(8c)電車がいま西条駅に／へ着いた。

기차가 지금 (방금) 사이조역에／으로 도착했다.

(8d)電車がもうすぐ西条駅に／へ着きます。

기차가 이제 (곧) 사이조역에／으로 도착합니다.

(8b)を除いた(8a)(8c)(8d)は、日本語の場合「へ」格と「に」格、韓国語の場合「로 (lo)」格と「에 (ey)」格が両方いえる例である。(8a)は、日本語の場合「へ」格でも「に」格でもほぼ同じニュアンスで使われているが、韓国語の場合「로 (lo)」格が用いられると、駅に到着したという意味よりも西条駅という場所そのものに焦点が当てられることになる。つまり、これは「通過」の意味を内包した方向選択としてほかの場所ではないということなのである。(8c)の場合も韓国語の例は、「로 (lo)」格を用いることにより伝達においての動的な効果が得られる。韓国語の「로 (lo)」格は日本語と違い、到着した結果としての到着点を表すことはできない。電車が駅に着くという表現において、「에 (ey)」格は止まっている状態を表すが、「로 (lo)」格は到着点というより動きがまだ止まっていない感じがある。

さらに、次の例をみてみよう。電車を人にかえると、「로 (lo)」格はより一層用いにくくなる。

(9)그는 역에／\*으로 도착했니?

彼は駅に／へ着きましたか。

응, 그는 역에／\*으로 도착했어.

はい、彼は駅に／へ着きました。

(10)나는 집에／\*으로 도착했다.

私は家に／へ着いた。

電車などの乗り物は、到着点が目的地の終着点とは限らないので「로 (lo)」格を用いることができるが（通過の一種ともいえる）、動作主が人間になると到着地そのものが目的地になるので「에 (ey)」格しか用いられなくなる。

次は移動動詞「行く」の例である。

(11)私は学校に／へ行った。

나는 학교에／로 갔다.

(12)私は昨日学校に／へ行って宿題をした。

나는 어제 학교에／\*로 가서 숙제를 했다.

(11)の文の「へ」格と「로 (lo)」格は学校に着いたかどうかはわからない。韓国語においては日本語の「へ」格とは違って、学校という目的地に近づくということより方向だけを表している。従って、(12)では「로 (lo)」格を用いることができない。

以上からわかるように、着点志向性移動動詞がとる日本語「へ」格は到着点を表すことができるが、韓国語の「로 (lo)」格は日本語とは異なり到着点を表さず、通過や方向だけを表す。

### 3.2 起点志向性移動動詞（移動の動きが起点を離れて目的地に向かう場合）

日本語の移動動詞のうち起点志向性移動動詞といえるのは、「出発する」「たつ」「去る」「離れる」などである。これらの動詞は基本的に「出発地」＋「を」や「から」に後接するが、「離れる」を除けば「目的地」＋「へ」にも後接することができる。そのとき、日本語の「へ」に後接する移動動詞「出発する」と「発つ」は、韓国語において「떠나다 (離れる)」と訳せる。日本語の小説とその韓国語の対訳本から挙げた例文のうち、「目的地＋「へ」＋出発する」のすべての例が「출발하다 (出発する)」ではなく「떠나다 (離れる)」に訳されていた。日本語には「目的地＋「へ」＋離れる」といった形式はないが、韓国語においては「目的地＋「로 (lo)」」に「떠나다 (離れる)」も「출발하다 (出発する)」と同様に後接することができる。しかし、これら二つの動詞は意味用法的に異なる動詞である。次をみてみよう。

(13)結局、犀吉だけが東京へに出発することになった。（『日常』p.23上）

결국, 사이키치만이 동경으로/\*에 떠났다.（『日常』p.43）

(14)どんな国へ/\*に出発したかということを聞きたいだろう。（『日常』p.34上）

어떤나라로/\*에 떠났던 것인지 궁금하지 않아?（『日常』p.57）

(13)は、日本語の場合「に」格と「へ」格の両方を用いることができるが、韓国語の場合「에 (ey)」格に置き換えると不自然な文になる。(14)は、日本語の場合は「へ」格、韓国語の場合「로 (lo)」格しか用いることができない。そして、韓国語の場合、移動動詞「떠나다 (離れる)」を「출발하다 (出発する)」に置き換えることはできない。これらの文は、動作主が目的地に着いているかどうかは関係なく、単に目的地に向けて出発したという意味になる。

ここで先に述べた日本語の「目的地＋「へ」＋出発する」という構文に、韓国語においては、「출발하다 (出発する)」より「떠나다 (離れる)」がよく用いられる理由は何かという問題点を考えてみたい。

まず、韓国語の移動動詞「출발하다 (出発する)」と「떠나다 (離れる)」は文における区別は明白である。「출발하다 (出発する)」は具体的な目的地の場合にのみ用いられるが、「떠나다 (離れる)」は目的地が明白でない場合にも用いることができる。

(15)나는 내일 동경으로 출발할 예정이다.

私は明日東京へ出発する予定である。

(16)나는 내일 동경으로 떠날 예정이다.

\*私は明日東京へ離れる予定である。

(17)\*그는 멀리 출발했습니다.

彼は遠くへ出発した。

(18)그는 멀리 떠났습니다.

\*彼は遠くへ離れて行った。

(19)먼 나라로 떠나고 싶다. (\*출발하고 싶다)

\*遠い国へ離れていきたい。(出発したい)

上記の(15)(17)のように、日本語の「目的地＋「へ」＋出発する」構文は、目的地が明白であるかどうかは問題にならない。しかし、韓国語は目的地が明白な場合は「目的地＋「로 (lo)」＋출발하다 (出発する)」構文が用いられ、目的地が明白でない場合には移動動詞「떠나다 (離れる)」が用いられる。日本語の「離れる」は起点格しかとらず、目的地に向けて行くという意味はもたない。

(20)船が島の方へ(と)離れていった。

上記の例は、日本語においても「離れる」が使われている。しかし、この例の島は目的地ではなく方向だけを表している。

韓国語の「떠나다 (離れる)」は、目的地まである程度の移動距離を要求する動詞でもある。近い距離、方向を表す名詞句と共に用いられることはない。

(21)\*오른쪽으로 떠나다. \*右へ離れる。

(22)\*옆집으로 떠나다. \*隣の家へ離れる。

以上を、次のようにまとめることができる。起点志向性移動動詞は、日本語においては、場所名詞の目的地が明白であるかどうかで「へ」格をとるか「に」格をとるかが決まる。一方、韓国語においては場所名詞が目的地の場合「로 (lo)」格しか用いられないが、場所名詞の目的地が明白であるかどうかで移動動詞「출발하다 (出発する)」や「떠나다 (離れる)」が用いられるのである。

このことを次の表にまとめる。

	日本語	韓国語	
目的地	に/へ出発する 明白/明白・不明	로 출발하다 (出発する) 明白	로 떠나다 (離れる) 明白・不明

#### 4. 移動動詞の動作が往復を表す場合

韓国語の格助詞「로 (lo)」は、日本語の格助詞「へ」と違って「行って来る」「通う」などの往復移動を示す動詞とは共に用いられない。往復を表すというのは、最終的に発話場所に戻ってくるという意味である。

(23) 卑弥子が銀行へ行って来たらどうだい。(『日常』p.102上)

히미꼬가 은행에／\*으로 다녀오면 (갔다오면) 어떨까? (p.133)

(24) この子をどこかへ捨ててこなければならない。(『日常』p.55下)

이아이를 먼곳에／\*으로 버리고 오는 것이 좋겠어. (p.84)

(25) 昼も夜も、温泉マークへ通い詰めだったんだから。

밤낮 할것없이 온천에／\*으로 다녔다.

上記の例は、「로 (lo)」格に置き換えることができない。しかし、次のような文では、「로 (lo)」格が成立する。

(26) 학교로 가서 청소를 하고 집으로 돌아왔다.

学校へ行って掃除をして家に帰ってきた。

これは、二つの移動動詞のうち一つに対して目的地、もう一つに対して到着地という場所が存在し、かつそれぞれの移動は一方向であるからである。

これに対して(23)～(25)のように往復移動を表す移動動詞の場合、目的地だけが現れているなら、「로 (lo)」格を用いることはできない。これは、往復移動は二回以上の移動が行われていることを表しているの、一方向ではないことを意味する。韓国語の「로 (lo)」格は到着点を表せないの、往復という一方向ではない二つの移動の場合には用いることができない。

## 5. 所有物の移動 (非自力運動)

所有物が移動する場合、日本語の「へ」格と韓国語の「로 (lo)」格は、それぞれ「に」格「에 (ey)」格に比べて動詞との位置が離れば離れるほど動詞との関連性が弱くなるので(30)のように不自然な感じがする。

(27) 彼が殺した犬を海に投げ捨てた。 그가 죽인 개를 바다에 던져버렸다.

(28) 海に殺した犬を投げ捨てた。 바다에 그가 죽인 개를 던져버렸다.

(29) 彼が殺した犬を海へ投げ捨てた。 그가 죽인 개를 바다로 던져버렸다.

(30) ?海へ彼が殺した犬を投げ捨てた。 ?바다로 그가 죽인 개를 던져버렸다.

## 6. 通過

韓国語の「로 (lo)」格には日本語の「へ」格では表せない通過の意味がある。次の(31)はそうした例である。

(31) 그는 정문을 통해서 / \*에 갔다.

彼は正門へ (を通過して) 行った。

(32) 그는 (매일) 학교로 갑니다. (方向の選択)

彼は (毎日) 学校へ行きます。

(33) 그는 (매일) 학교에 갑니다. (通う)



彼は（毎日）学校に行きます。

(32)の場合、「毎日」という副詞を入れると「로 (lo)」格と「에 (ey)」格による文の意味の違いが明白に現れる。「로 (lo)」格の場合は、学校という方向を選択して通って行くという意味になり、「에 (ey)」格の場合は学校に通うという意味として解釈することができる。しかし、日本語においては(32)と(33)の違いはほとんどない。

次の例文は日本語と韓国語の方向性格助詞の違いをよく表している。

(34)너 내일 무엇을 하니?      あなたは明日何をする。

학교에/\*로 갑니다.      学校に/へ行きます。

(35)저 산은 어떻게 갑니까?      あの山はどう行きますか。

학교로(해서 )/\*에 갑니다.      学校\*へ/\*に行きます。(学校を通って行く)

## 7. 方向を表す場所名詞

日本語は‘方向’‘方’などの方向を明示する名詞の後に、「に」格と「へ」格のどちらも用いることができるが、韓国語は「로 (lo)」格しか用いることができない。

(36)それから僕と夜警の制服を着たままの犀吉はビルを出て東京湾の方向に歩いた。

그런다음에 나는 야간경비제복을 입고 있던 사이키치와 함께 동경만 방향으로/\*에 걸어갔다.

(37)あなたが変な方向へ歩いていくことが分かった。

네가 이상한 방향으로/\*에 걸어가고 있다는 사실을 알게 되었지.

しかし、(38)では「に」格を用いることはできない。

(38)バスが橋の方へ/\*に走っている。

버스가 다리쪽으로/\*에 달리고 있다.

## 8. まとめ

以上、日本語の「へ」格と韓国語の「로 (lo)」格の用法の差異について、動静関係と移動動詞の観点から見てきたいいくつかの問題点をまとめると、次のようになる。

まず、日本語の「へ」格と韓国語の「로 (lo)」格における動静関係の差異についてである。日本語の「へ」格と「に」格は、「動作」と「静止」の領域において共有する部分が広がっている。ただし、「いる」「ある」などの存在を表す動詞の場合には、「に」格だけが用いられる。また、「へ」格も「静止」の領域まで大部分浸透している。むしろ、口語においては「へ」格を好んで使う傾向にある。一方、韓国語においては、方向という動的な場合は「로 (lo)」格を用い、存在という静的な場合は「에 (ey)」格を用いる。

次に、移動動詞との関係をまとめてみる。移動動詞の動作が片道の移動を表す場合と往復の移動を表す場合とに二分し、日本語と韓国語を比べた。さらに、片道の移動を着点志向性移動動詞と起点志向性移動動詞に分けた。

まず、着点志向性移動動詞の場合、到着点に焦点を当てて日本語の方向性格助詞と韓国語の方向性格助詞について述べた。韓国語の「로 (lo)」格は到着点を表すことができるが、日本語の「へ」格は「に」格とほぼ同義で到着点を表すことができる

起点志向性移動動詞の場合、日本語においては「目的地＋「へ」＋出発する」構文を、目的地の場所名詞が明白であるかどうかで「に」格と「へ」格が使い分けられる。一方、韓国語の起点志向性移動動詞は「目的地「에 (ey)」」に後接することができない。「로 (lo)」格を用いた場合、目的地が明白かどうかで移動動詞「출발하다 (出発する)」や「떠나다 (離れる)」が後接される。

移動動詞の動作が往復を表す場合、韓国語の「로 (lo)」格が一方向しか表せないので、このような動詞は「로 (lo)」格と共に用いられない。そして、最後に5章、6章そして、7章では問題点だけを述べた。

そこで、次のようなものを今後の課題にしたい。まず、1章から4章まで、「へ」格と「に」格を動静関係として、そして、韓国語においても「로 (lo)」格と「에 (ey)」格をそうした動静関係として一貫して説明できるようにまとめる作業である。そして、問題点だけを触れた5章、6章、7章においても同じく上記と一貫して取り扱いたい。最後に、日本語の「へ」格と「に」格は、ほぼ同義目的地を表すことができる。しかし、形式が異なるからには、「へ」格と「に」格には目的地を共に示すとはいえ意味用法上違いがあると思われる。この点も今後の課題にしたい。

#### <註>

- 1) 韓国語において、「로 (lo)」格は方向 (direction) 性表示の格助詞であり、「에 (ey)」格は処所 (location) 性表示の格助詞である。本稿では方向性を表す格助詞を方向性助詞と略称する。
- 2) 田中 (1977) の「へ」の用法:
  - a) 動作の向けられる方向・作用の及んでいく対象・行為の働きかける目標などを示す。
  - b) 移動性ないし経過性の動作・作用について、その成り行き・到達点・目標・結果などを表す。
  - c) 動作が存在する場所
- 3) 例文(2)(3)(4)は田中 (1977) の用例である。田中が用いた「動作の存在する場所」という表現を本稿でも使用する。

#### <参考文献>

- 青木伶子(1956)「「へ」と「に」の消長」『国語学』24  
池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館  
石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波講座

- 金子弘(1986)「格助詞「に」の用法分類」『国語学論説資料』23論説資料保存会
- 此島正午(1966)『国語助詞の研究』桜楓社
- 小松光三(1986)「移動の運動の表現一格助詞「に」「を」の表現機能を中心に」  
『国語学論説資料』23論説資料保存会
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館
- 杉本武(1986)『いわゆる日本語の格助詞の研究』凡人社
- 鈴木英夫、王彦花(1987)「場所名詞につく「デ」「ニ」「ヲ」の用法の異同について」  
『茨城大学人文学部紀要（人文学科論集）』20～22
- 田窪行則(1984)「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12号、  
大阪外国語大学研究留学生別科
- 田中章夫(1977)『日本語文法』7「5.助詞(2)、7.助詞(3)」岩波講座
- 塚本秀樹(1991)「日本語における格助詞の交替現象について」『愛媛大学法文学部論集』  
第24号
- 成田徹夫(1979)「動詞の意味と格一移動に関する動詞を中心に一」『東京都立大学人文  
学報』132
- 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院
- 野間秀樹(1990)「朝鮮語の名詞分類」『朝鮮学報』第135号
- 堀川智也(1988)「格助詞「に」の意味についての一試論」『東京大学言語学論集』88
- 松尾拾治郎(1969)「へ」松村明編『助詞助動詞詳説』学燈社
- 宮島達夫(1986)「格支配の量的側面」宮地裕編『日本語研究（一）』明治書院
- 森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社
- 山田孝雄(1954)『日本文法講義』寶文館
- 洪允杓(1978)「方向性表示の格」『國語學』6